

# 試験研究機関について

# 1 試験研究機関の概要

所属名	所在地	役割	試験研究に従事する職員数 (22.4)	平成22年度の試験研究	
				課題数	予算額(千円)
原子力環境監視センター	敦賀市	・環境放射線モニタリング	11	3	3,485
衛生環境研究センター	福井市	・地域保健に関する総合的な調査研究 ・地域に密着した環境問題への対応(ダイオキシンの低減対策等)	29	25	45,770
工業技術センター	福井市	・本県の産業振興のための技術支援 ・県内企業への技術相談 ・新技術や地域産業に関する研究開発	60	46	172,620
農業試験場	福井市	・経営革新のための新品種育成 ・食品加工技術の研究と加工品開発支援 ・園芸振興のための先導的実用研究	45	25	56,891
園芸試験場	美浜町		10	8	15,608
畜産試験場	坂井市	・畜産振興のための先導的実用研究 ・受精卵移植技術の向上	15	10	36,122
水産試験場	敦賀市	・漁獲方法、資源管理方法、養殖魚育成技術開発・指導 ・本県産親魚を用いた種苗の供給	22	13	39,269
総合グリーンセンター	坂井市	・森づくり技術の開発 ・県産材製品の開発 ・低コスト、高効率の作業システムの開発	9	9	22,070
雪対策・建設技術研究所	福井市	・雪対策技術の開発 ・現場の技術的課題に対応した建設技術の調査・研究	7	10	23,291

## 【参考】近年の主な研究成果

### ○開繊炭素繊維を用いた先端複合材料の立体加工技術開発（工業技術センター）

- ・炭素繊維束を幅広く薄く広げる「開繊技術」を用いて、壊れにくい炭素繊維強化複合材料成形品を開発
- ・この研究成果を県内企業に技術移転し、スポーツ用品やパソコン本体材料として事業化されたほか、小型EV車の軽量ボディの開発にも活用されている。

### ○植物性乳酸菌を利用したヨーグルト様の米発酵食品の開発（農業試験場）

- ・市販ヨーグルトは全て牛乳を使用する中、本県産コシヒカリを使ったヨーグルト様の発酵食品を開発
- ・牛乳を使わないため脂肪分ゼロとヘルシーで、含まれる乳酸菌は市販ヨーグルトの十倍から百倍、生きたまま腸に届く特性を有する。

### ○ウメ新品種「福太夫」への高接ぎ更新技術の開発（園芸試験場）

- ・高収量で果肉の中に樹脂の塊ができる障害（ヤニカ）の発生もなく、梅干しへの加工適性が優れている「福太夫」（園芸試験場で開発したウメ新品種）を高接ぎし、速やかに品種更新できる技術を開発

### ○県産コシヒカリなどを配合した飼料用米の活用（畜産試験場）

- ・地産地消や食の安全への意識が高まる中、県では21年度から飼料用米の生産を本格的に実施
- ・養豚や養鶏で飼料用米の活用に関する情報収集を行い、「福井のお米を使った福井の卵」や「コシヒカリで育った豚肉」などのブランド化を進める。

### ○アオリイカ活魚輸送技術の開発（水産試験場）

- ・味の良さから「イカの王様」とも呼ばれるアオリイカを生きたまま輸送する方法を考案
- ・吐く墨などの影響で長距離輸送は難しいとされてきたが、新鮮なアオリイカを大都市圏に出荷できるようになり、観光土産への活用も見込まれる。

### ○松くい虫に強いアカマツの開発（総合グリーンセンター）

- ・1980年代以降県内で拡大した松くい虫被害を防止するため、松くい虫に抵抗性のある品種を開発（平成26年度から苗木を出荷予定）

### ○夏の熱を利用した融雪システムの開発（雪対策・建設技術研究所）

- ・地中のパイプなどに不凍液を入れ、夏季の熱で温めて蓄熱し、冬季には温かい液をポンプで循環させて雪を溶かす仕組みを開発し、福井市幸橋や清水橋、上中ICアクセス道路、JR福井駅周辺歩道等で導入
- ・従来の電熱融雪に比べ使用電力量は約30分の1で、環境負荷の低減に役立つ。

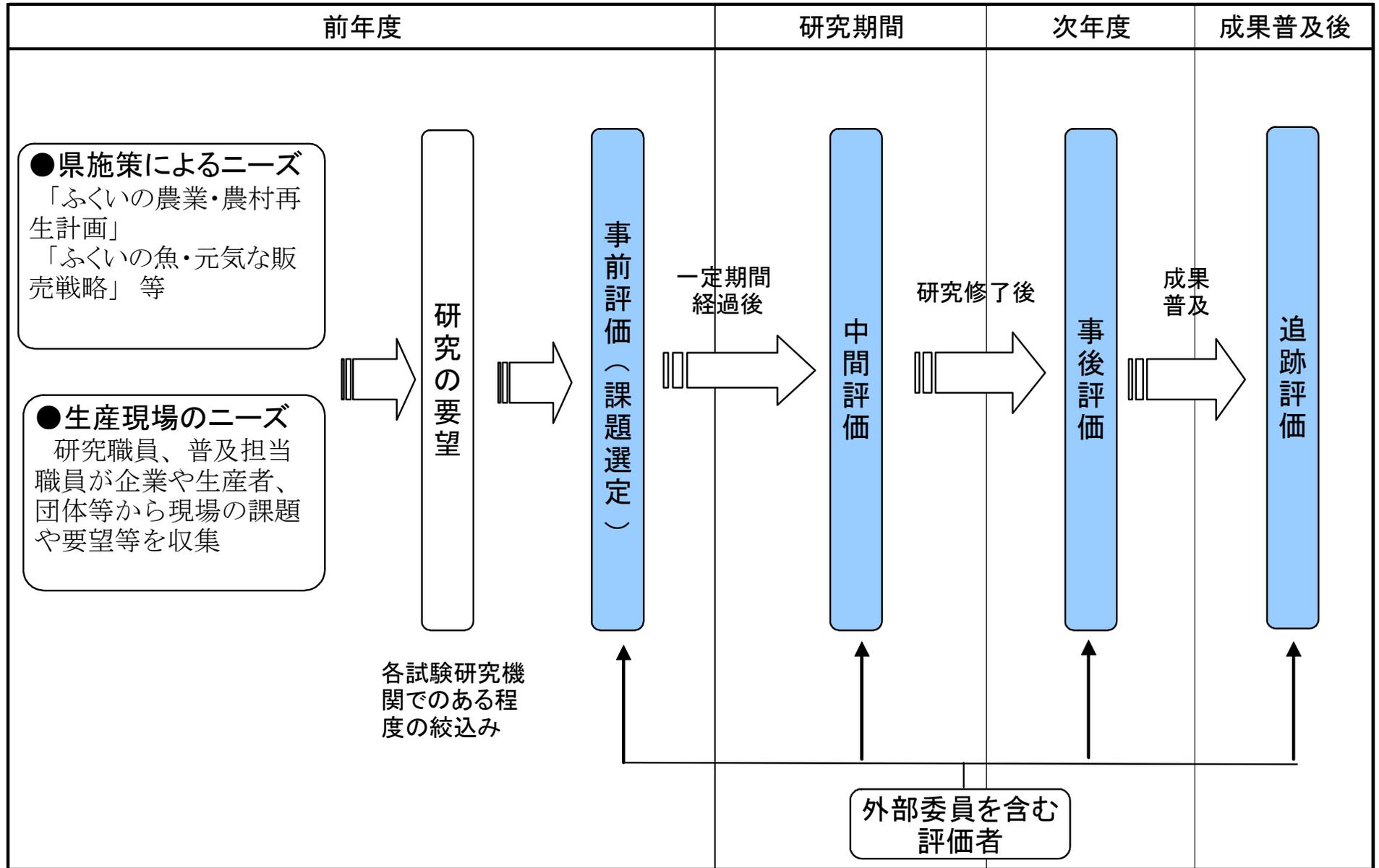
## 2 試験研究評価

- ・ 試験研究課題の設定に当たっては、各試験研究機関において、外部委員を含んだ評価者による評価を実施
- ・ 5年毎を目途に試験研究機関の運営全体を評価対象とした機関評価を実施し、重点研究開発分野の設定や試験研究運営体制の妥当性等を判断し、より効率的・効果的な試験研究を推進

### 【評価時期と位置づけ】

項目	評価時期	位置づけ
事前評価	研究課題選定時	技術的可能性や社会産業への波及効果などの観点から評価し、同時期に提案されている複数の研究課題との比較を行う。
中間評価	研究開始後、一定期間経過時	それまでの研究成果を基に当該研究の見直しの必要性を含めた研究方針の確認を実施し、研究継続の是非等について判断する。
事後評価	研究終了時	事前評価の内容との比較や予測された成果への達成度について評価し、要因分析を行うことで今後の研究活動の参考とする。
追跡評価	研究終了から一定期間経過後	研究成果の実用化や社会産業への普及等の観点から評価を行い、今後の研究活動へフィードバックする。

【参考】試験研究評価のながれ



### 3 研究成果の測定、PR

- ・各試験研究機関において、研究活動の報告会や施設の一般公開等を実施

【参考】各試験研究機関における普及・啓発の取組み例

- 工業技術センター「一般開放」、「先端技術体験見学会」  
研究成果と最新設備の実演・展示により、県民や中高生などが科学技術を身近に体験
- 農業試験場・園芸試験場「アグリチャレンジLABOクラブ」  
小学生とその家族が田植えや稲刈り、おもちづくりなど米づくりを体験する教室  
農業試験場、園芸試験場あわせて11教室、年間を通じ各教室3回開催
- 畜産試験場「わくわく牧場探検隊」  
ホルスタイン牛での搾乳体験、バター作りなどを通じて畜産の理解促進

#### 試験研究機関の主な課題

- ・研究評価において、研究の成果が生産額の増加や所得向上など県民に経済的利益をもたらすものかどうかという観点が不足
- ・試験研究機関の活動内容・研究成果が県民に認知されていない。  
⇒・研究テーマの設定から研究の成果までを県民に分かりやすくする仕組みづくり
  - ・試験研究機関の活動に興味を持ってもらう活動の強化